

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十八年十二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十三卷第八号（通巻第一五二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第152号

12. 2006

無名庵

品川 鈴子

うぶすなの藤莢爆ぜる浜日和

本山の亀虫縫る紺背広

昏早くなる大前の香時計

天台の塗膳どれも菊づくし



門跡のつむりに似たる榎櫃挽ぐ  
下戸ながら二杯を越の新走り  
芒の穂式部の筆のごと撓ふ  
連衆は菊人形に迎へらる  
無名庵畳廊下に柿落葉  
耳鳴りは巴の声かそぞろ寒



# 玉 鈴

神奈川 山崎辰見

コスモスへお辞儀返して転校す  
爽やかに聖塔囲み村百戸  
栗林猿は神出鬼没らし  
祝辞述べ金牌の菊侍らせて  
休耕田ところ狭しと草紅葉

香川 合川月林子

観月やビルに晝の間のありて  
あるだけのおもちやちらかし月を待つ  
出稼ぎの人もまじりて月見せる  
つまみ食ひして稲妻に叱られる  
白き雲一つを浮かべ秋の色

大阪 赤木真理

喪の帯を母に結ばれ芥子の花  
弔問の客の途絶えず葉鶏頭  
仏壇に香るコーヒー今朝の秋  
子の喧嘩見て見ぬふりも椎の秋  
これといふ特技もなく秋の薔薇

# 吟

兵庫 秋田直己

夏休み子等を集めて英語塾  
花火果て迷子預かる本部席  
六甲の風を取り込む扇風機  
藁編みのスリッパ捨て、夏果てぬ  
新涼の独佛ワイン飲み比べ

愛媛 足利罇子

秋時雨幼馴染みの忌が明ける  
聞き流す事も世渡り半夏生  
長電話一語気になる熱帯夜  
山門より見ゆ大屋根に夏燕  
青葉蔭除幕の句碑にふれてみる

大阪 尼寄太一郎

赤ちゃんの脚が画く○<sup>まる</sup>天瓜粉  
宿題のドリル見せ合ひ竹床几  
丹田に帯長男の秋 袷  
香水を並べて古稀の飾り棚  
何時の間に軒卒寿の籠枕

兵庫 荒木 治代

ちちははの家ちんまりと青田なか  
寺を指す標覆ひて草茂る  
喘ぎ来て涼む山頂カフエテラス  
登山靴横 一列に漢足湯  
夕立の気配に帰心俄なり

大阪 池田 かよ

涼やかにとんと決まりし足拍子  
太郎冠者せりふ巧みに袴能  
爪先に気魄みなぎり袴能  
乙女らの狂言小舞藍浴衣  
素謡の朗々透る夏館

大阪 石橋 萬里

子の髪に西瓜の種がへばりつく  
鯛の合宿所なる大櫂  
ワンピース端折り御苑の蛸姑釣る  
石佛を三段跳の蟻蛸越ゆ  
秋扇噂をいくつ畳み込む

東京 今井 忍

頭上よりばさりと落ちる屋敷蛇  
老鶯の声警策に打たれけり  
対岸の夫に日傘を高振りす  
碑ひの低き分校跡にちちる鳴く  
琴運び出す新涼の公民館

齋部 千里

吹き抜ける風あやつれる葛の花  
無花果を呉れし娘の仏顔  
撫でて過ぐ秋めく風や草の丈

浮田 胤子

羅のいと涼しげに小磯展  
小磯展画で見し冬帽アトリエに  
いちぢくの生る木を枯らす髪切虫かみきりよ  
熊狩に使ひし銃の黒びかり

# 薬草歳時記

(二五二)アロエ

市橋章子

宗祇みち早も紅濃く花アロエ

小枝秀穂女

アロエは「神秘の植物」といわれ、遠い昔から人と深い  
かかわりをもってきました。

四千年前のエジプトのミイラの膝の間にあつたという医  
学書『エーベルス・パピルス』にもアロエの薬効が記され  
ています。

原産地は主に東南アフリカ周辺の乾燥地帯。  
ユリ科アロエ属に属し、種類は多く、変種も加えると、  
実に六百三十七種がリストアップされています。

高さが十メートルにも及ぶ大型種から、わずか数センチ  
たらずの小型種まであり、葉の形、花の色なども変化に富  
んでいます。夫の赴任地アラブ首長国連邦ドバイで、見上  
げるようなアロエに出会い驚いた事を思い出します。

「あの苦味が効くのよね」と「医者いらず」の名で愛用  
されているのは、中型種の「キダチアロエ」です。

冬季に花茎の頂に朱紅色の花を房状につけ、比較的寒さ

に強く、栽培しやすいものです。

生葉をすりおろして、少量で胃のもたれをとり、少し多  
く用いて、その緩下作用で便秘をなおす。又、火傷や切り  
傷の手当てに、皮を剥いてゼリー状のものを貼り付ける、  
等々は経験された方も多い事でしょう。

効能も、苦味健胃・緩下・抗菌・抗潰瘍・抗癌・美白・  
抗アレルギーなど広範囲にわたり、美容に、健康に、使い  
方も様々に工夫されています。

近年、免疫機能を亢進させる作用があることが発見され、  
自身の持つ自然治癒力を強める働きがあることがわかって  
きました。

一九五二年、ビキニ環礁での水爆実験の放射能による火  
傷の治療薬として、原住民や死の灰を浴びた第五福竜丸の  
被爆船員達に、アロエベラの生葉が用いられました。その  
著しい効果に、アロエの細胞賦活作用が証明され、学問的  
研究が更に進みました。

アロエは世界各国で薬効が認められ、成分、効用の研究  
も進んでおり、今後の総合的研究の成果が期待されます。

参考文献 肥田和夫「アロエの効用と栽培」金園社

難波恒雄「和漢薬百科図鑑」(II)保育社

三橋博監修「原色和漢薬大図鑑」北隆館

著者略歴 神戸薬科大学卒

キダチアロエ (キダチロカイ、ヤクヨウアロエ) [アロエ属] (ゆり科)

*Aloe arborescens* Mill.

(木立蘆薈)

切断面

須賀悦子画



蒼茫の海がアロエの血を洗ふ

青柳志解樹

アロエ咲く風の酷しき流人島

鈴木 理子

遺伝子は大器晩成花アロエ

斎藤久美子

ナイロビは影濃しアロエ花咲けり

新聞 絢子

潮風に老いてより朱の花アロエ

品川 鈴子

花アロエ砂の地平に夕日燃ゆ

市橋 章子

終の住処さがす旅なり花アロエ

佐田 昭子

花アロエ群れて地獄の底めきぬ

塩出 眞一

アロエ花魔女には似合ふ簪か

藤澤希宗子

伊豆で知る温度差しめすアロエ花

八木 紀子

ぐろっけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

尼の訪う煮豆の老舗菊日和 大阪 角谷美恵子

五条よりちやわん坂へと涼新た

冥途への井戸くつきりと百日紅

盆の月そつと閻魔をのぞく窓

稲妻やパズルの数字解きあぐね 東京 木野 裕美

稲穂垂れバケツ觀察終了す

乃木旧居軋む階段秋徽雨

乃木旧居秋燈冥き自刃の間

鞆より仔犬の声す秋の夜 東京 遠藤とも子

建前の幣ぬれてをり秋の雨

新しき身内新米届くなり

女子校の受付きびし文化祭

いちはやく秋の来てをり膝関節 兵庫 内山 芳子

新涼の学舎に響く竹刀打ち

おはじきを並べさんすう秋灯

生家への一本道を鯛雲

骨を切り播り身の鱧の団子汁 東京 小松サチコ

齡<sup>とし</sup>忘れ大きい方の西瓜とり

庭一ぱい我がもの顔に芙蓉咲く

早寝して見忘れ詫びる月花美人

鱗雲記憶にはなき母のこと 兵庫 林 美智

茅<sup>湖原野草にて</sup> 蝸の閣<sup>たかのの</sup>まもる磨崖佛

寝そびれて過ぎし日想ふ良夜かな

次世代は洗ふ障子もなき住ひ 兵庫 松本 恒司

秋日傘旅の座長に女の香

赤とんぼ風に断層あるらしく

天と地の狭間に生きて蕎麦を植う

鷹渡る島の風力発電所 愛媛 三浦ひろみ

早稲の穂を揺らし外車の駆け抜ける

玉垣に芸妓の名あり鉦叩

街あかり控へ目に鳴く轡虫

月光に親探し哭く貰ひ犬 香川

ひと言の余分と不足しのぶ草 香川 横内かよこ

花野行く忘れたきこと携へて



# 秀 鈴 記

尼の訪う煮豆の老舗菊日和

角谷美恵子

尼寺では食べものほぼ総ては自給自足かと思われる。特に煮豆などはとろ火で時間をかけてふつくらと仕上げるのはお手の物。なのに、いい日和に煮豆の老舗へ暖簾を潜る尼のつむり。墨染めの小腰をかがる姿はどこか甘くて柔かな黒豆に通じる。供養のためか、縁故なのか。仔細ありげで興を惹く。

乃木旧居軋む階段秋微雨

木野 裕美

陸軍大将乃木希典は日露戦争で旅順を攻略し、後に学習院長を務めたが、明治天皇の大葬の日に自宅で妻と共に殉死した。彼の人物評はいろいろ伝えられ、その旧居を訪ねると、簡素な階段は秋の長雨に軋む。当人にしか解らない心の軋みかもしれない。

鞆より仔犬の声す秋の夜

遠藤とも子

巻頭三句 品川鈴子 評  
四句〜十五句 馬越幸子 //

\*選句は全て 品川 鈴子

夜長の駅か電車なのか、傍に居合わせた人の鞆から、思いがけない犬の声が聞こえる。ふいにばれたペットの存在で、ゆきずりながら隠し事を共有する親しみが、辺りに漂い、無聊ぶらうもひととき紛れたことだろう。

おはじきを並べさんすう秋灯

内山 芳子

5+8がどうしても15にならない子供に、どうすればよいか、おばあちゃんは考える（お母さんでも良いのです）おはじき遊びをやった世代とすれば、言語能力が充分でない子供には、体で覚えさせるのが一番だと良く知っています。

静かな秋の夜の幸せな情景

早寝して見忘れ詫びる月花美人

小松サチコ

一夜かぎりの花はどれも香りが強く花姿も美しい。精いっぱい咲いてくれたのに自分はずっかり寝てしまった。

朝早く目覚めた作者は、うなだれた月下美人を見て自分も同じポーズを取っているのでしょう。

鱗雲記憶にはなき母のこと

林 美智

幾つになっても母を恋う気持は変わらない、それどころか年をとる毎に強くなる。記憶にはない程早くに母上を失くされた作者はせめて記憶のかけらでも欲しいと思う。けれども西空に広がる鱗雲の彼方には、作者を忘れることなく見守って下さる母上様がおられます。

秋日傘旅の座長に女の香

松本 恒司

旅の、とありますから大衆演劇の女形の舞台姿を詠んだものと解釈しました。若い女形のでやかさ、初々しさは本物の女など足元にも及ばない程美しい。

虚構の世界の香りたつ女性像

玉垣に芸妓の名あり鉦叩

三浦ひろみ

昔花街があった近くにあるお社を詠んだものと思われるま

す。音曲に秀でた妓がさらに芸の上達を願って寄進した玉垣であろうか。信心深い名妓の名は今一柱の玉垣に残るのみ。

鉦叩が効いていて佳句

ひと言の余分と不足しのぶ草

横内かよこ

よくある事で、年を重ねても同じ様な事を繰り返す。他人の余分なひと言に傷つく事もあれば、自分の不足の言に後悔する事もある。

どちらにせよしのぶ草（何時迄草）とあるので今回は少し長引いている様です。

玄関に目高泳がせ客を待つ

藤田 宣子

暑い最中とてお客様を迎えるにあたって、ありきたりの花よりもと思ひ下駄箱の上に目高を入れた水槽又は、ガラス鉢を置いたと思われます。玄関での挨拶は目高に始まり、座敷にては茶菓のもてなし、四方山話し、お帰りの時は玄関にてまたもや目高となった。

小さな目高がもてなしに大活躍した一日